# 巻頭ご挨拶

ブラジル将棋連盟名誉会長
柄沢　喜美雄

戦後間もなく、コロニア社会の混沌たる中に在り、有志各位の奔走よろしきを得てブラジル将棋連盟が結成されましてより、幾多の紆余曲折を経まして、茲に創立五十周年記念式典を催し、併せて全伯将棋名人戦第五十回大会を開催し、無事これらの行事を終了致しました事は、関係者の一人として誠に喜びにたえない処であります。

加えまして、今回、記念事業として進められておりました将棋人名録の編纂も着々として、各地の貴重なる資料が寄せられまして、只今一巻の書として皆様のお手許にとどけられ

る運びとなりましたことは、一口に五十年と申しますが、この間の歴史の重味を考える時、この一巻の記念誌、人名録の持つ重要なること、また発刊の意義の大なることを痛感するものであります。

移民の柳行李と共にブラジルに渡った将棋は、一世移民と共に消え去るものといった考え方もありましたが、今五十年の歴史をふまえて、コロニアの将棋は次なる世代へ向けて新しい時代の幕開けを担う大切な時を迎えております。

一世代を終り、次なる時代へ移るためには、その地域における習慣になじむことから始まります。そのためには先ず言葉の障壁をなくすことが大切であり、コロニア将棋を二、三世へ普及するためには、何よりも先ずやさしい将棋の指導書の翻訳から手をつけるべきであります。

今ここに記念誌を皆様にお送りするに当り、我々は五十周年記念式典を無事に済ませ五十回大会を終り、人名録を作ったコロニア将棋連盟は、そこで一息つくのではなくて、ここから改めて次なる目標へむけて、新しい闘志を燃やして進むのだという意識をもっていきたいと、あえて所信の一端を述べまして巻頭の挨拶と致します。

## 記念誌発行に寄せて

ブラジル将棋連盟会長
内海　博

茲に「ブラジル将棋連盟創立五十周年記念」並びに「第五十回全伯将棋名人戦」の記念誌を発行致し、皆様のお手許へお届けできる運びとなりました。

当初の企画は五十周年記念事業として、全伯将棋人名録を編纂し、これを五十回大会当日のお祝の引出物とする案であ

りましたが、その後いろいろと変更があり、五十周年の記念誌を発行した方が意義があるとの提案をいれて、タイトルを変更し、そのため発行が延期され今日に至りました。

今ひるがえって見て将棋連盟は、過去において殆んど記録を残しておりません。今更古いことを掘り返しても詮ないことでありますが、五十周年という歴史の指標の元に立って、余りにも何もないことを残念に思いますが、今回記念誌発行に当り、つくづくとこのことに思い至りました。

人名録につきましては、一九七一年に山下明良氏が独自の構想で、又ご自身奥地をテクテク歩き回って実に一千五百余名の棋士名を集録した記録が残されております。このことは、今にして思うにブラジル将棋連盟の貴重な歴史の証言であり、山下氏の功は忘れることのできないものであることを、この機会に活字にして改めて棋士皆様にお知らせしておきたいと思います。

幸いにして、山下氏の後をついで、ここに実に二十五年振りに巻を改める機会を得ました。

今回の人名録は、調査に当り山下氏のように奥地を回っての取材でありません。現在の各地にある将棋連盟の支部役員の皆様のご協力に依るものでありまして、従いましてその記載もれとなったご芳名が多々あるかと存じます。特に老来将棋会にご参加のない方、また地方に支部のない処、青年会に将棋部の活動はあっても対社会的な活動のない所など沢山ありますので、次回はこれ等のものを総括していきたい。少なくとも五年後或いはもっと早く稿を改めたいと考えておりますので、お手許にとどけられました人名録の不備、ご不満の点を指摘し、ご叱正頂きますようにお願い申し上げます。

# 祝　辞

在サンパウロ総領事館
文化担当領事　今　井　泰　志

この度、ブラジル将棋連盟が創立五〇周年を記念して、人名録を作成されることは誠に意義深いことと思います。また、時期を併せて第五〇回将棋名人戦が開催されますことを重ねてお慶びいたします。

さて、将棋といいますとその歴史は非常に古く、文献によれば次のように解説されております。将棋が我が国へ中国から伝わったのは八世紀頃、吉備真備が唐から持ち帰ったのが最初といわれている。

その後、現在のような将棋が広く行われるようになったのは、安土桃山から江戸時代に入ってからで、織田信長・豊臣秀吉も将棋を愛し、初代名人大橋宗桂に扶持を与えた。徳川家康も天下を統一すると一六〇七年宗桂に五〇石五人扶持をあたえ、名人将棋所の司に任じた。その後宗桂嫡子の宗古、次男の宗与を祖とする大橋分家、大橋門下の伊藤宗看を祖とする伊藤家が創設され、いわゆる将棋御三家家元として江戸時代三〇〇余年間交互に名人を継ぎ世襲職として寺社奉行支配、二〇石五人扶持の禄を支給された。この将棋所の制度も明治維新とともに崩壊したが、一九〇八年「万朝報」が初めて棋戦を掲載、棋界復興のきっかけとなった。次に特筆すべきは三五年関根名人の決断により従来の名人制を廃し、戦績による選手権制度としたことである。この様に将棋は一つの遊びから出発しながら、その長い歴史を経ていくなかでただ単なる遊びを越えて、日本文化の一端を担うものに昇華されてきていると言っても過言ではないと思います。また皆様既

に御承知の通り、日本においては羽生七冠王の誕生等をはじめとして従来の将棋の持つイメージが変わり、新しい文化として若者のファンが増えている等、近年の棋界の隆盛は目を見張るものがあります。

当地ブラジルにおきましては、一九〇八年の移住開始以来移住者の皆様は多くの労苦を重ねながら現在の日系社会を築いて来られました。その御苦労のなかで移住先駆者の皆様の中には、手作りの将棋を楽しみながら明日への活力を養っておられた方々も、沢山いらっしゃったのではないかと思います。そして地理的には日本から一番遠いこのブラジルにおいて、まさに日本文化となっている将棋が脈々と受け継がれ、ブラジル将棋連盟が結成され、名人戦が開催されるようになり、早や五〇周年を迎えることになったわけであります。

この五〇年間に亘り連綿と将棋の普及に努めてこられた関係者の方々の御苦労は並々ならぬものがあったことと思います。これら諸先輩方の御苦労に報いるためにも、この伝統的日本文化である将棋の普及に更に努力しなければならないと考えます。

それでは今後のブラジル将棋連盟の益々の御発展を衷心よりお祈り致しまして、私の挨拶と致します。

## 祝　辞

ニッケイ新聞社長　　高　木　ラウール

ブラジル将棋連盟が創立五十周年記念と併せて全伯将棋名人戦五十回大会をこのように盛大に催されますことは誠にお目出度いことと心からお喜び申し上げます。

私ども「旧日伯毎日新聞」はその創刊以来、先代中林社長ご一家が新聞を出す事と共に将棋の指導と普及に限りない力

を致された事はとみに有名であり、新聞社の一貫した考えで協力を惜しまなかった事は、不肖私が新聞社を引き継いだ時、同じように将棋の後援にも力を惜しまないつもりでおります。

ブラジルの将棋が今後も益々盛んでありますように、特に私としては今五十周年を祝ったブラジル将棋連盟の次の目標として、日本の名人に来て頂けるように願ってやみません。簡単ではありますが、これをもちまして私の祝辞と致します。本日は誠におめでとうございました。

# ブラジル将棋連盟５０周年記念誌

## もくじ

カラーグラビア　ブラジル将棋連盟創立５０周年記念式典
表彰者、功労者へ感謝状と記念品贈呈
今日の連盟を支えてくれた人々①と②

グラビア　アトラクション、思い出のアルバム

巻頭ご挨拶　柄沢　喜美雄　ブラジル将棋連盟名誉会長
記念誌発行に寄せて　内海　博　ブラジル将棋連盟会長
祝　辞　今　井　泰志　サンパウロ総領事館領事
祝　辞　高木ラウール　ニッケイ新聞社社長

山本勝造さんのことども
サンパウロ人文科学研究所所長　宮尾　進

コロニア将棋半世紀　一輝く功労者群像
伯将棋連盟四代会長　中林　昌夫

名人戦５０年大会（日伯毎日新聞より抜粋）
私の将棋歴　青木幹旺
もっと将棋を指そう　今村　幸
ブラジル将棋の今昔　水谷寅造
名人戦の思い出　大原友重
埋もれゆく足跡　武田春海

全伯名人戦優勝者　一覧表
１９９７年度役員

名人戦及び５０周年記念大会実行委
連盟歴代会長

付録
ブラジル将棋連盟人名住所録
ＡＢＣ順　６１８名収録

ブラジル将棋連盟　所在地

サンパウロ市シケイラ・カンポス街２５
電話（０１１）２７９－７６８７
Associacao Brasileira de Shogui
Rua Siqueira Campos, 25
CEP:０１５０９－０２０
Sao Paulo－SP－BRASIL
Fone:（０１１）２７９－７６８７

第８選に向かって多忙を極める下本八郎氏。コロニアの真面目な選良として声望があり、また本連盟の最大の理解者でもある。

連盟４代会長 中林 昌夫氏

安部順二州議員代理 宮原ジョルジェ氏

在サンパウロ日本国領事 今井 康志氏

ニッケイ新聞社社長 高木 ラウル氏

## ブラジル将棋連盟創立 50 周年記念式典

1997 年 8 月 23、24 日　於：ブラジル愛知県人会館

力強い開会の挨拶をする内海博連盟会長

連盟顧問 今村 奉氏

連盟副会長 中田 定和氏

県連副会長 菊地義治 氏

司会を務める 森永 直義氏

実力戦の雄、ベテラン中のベテラン大原勝重六段

連盟理事、実行委員長
吉川 長門氏

東パラナ州支部長
杉本 六郎氏

南パラナ州支部長
角田 斉氏

連盟師範
鳥山 久夫氏

## 表彰者・功労者へ感謝状と記念品贈呈

感謝状を読上げる内海博会長

連盟担当理事
中野 秀敏氏

連盟顧問
笹崎 孝作氏

研究会元会長
武田 春海氏

連盟顧問
柄沢 喜美雄氏

## 今日の連盟を支えてくれた人々 ①

アマゾン地区から初参加して三段戦で優勝の高野勇治・新四段。松村俊国、小柴隆俊、左東栄之助氏などの顔が見える。

5,000キロのアマゾン地区から来てくれた富岡親義・北伯将連会長

左からノロエステ支部の鈴木一男、全マ州将連会長の柘植二郎の両氏。

2日間ぶっ通しでレンズとにらめっこをして、貴重な資料を残してくれたのが、この福沢哲男4段。

左から、水口博、松元優公、山田和男氏らノロエステ地方代表の面々。

## 今日の連盟を支えてくれた人々 ②

左からシダーデ・アデマルの高山安弘、その左肩に聖南西地区代表の太田孝之、左隣には川端有助、右端に日伯浅路幸男記者の諸氏。

第2代会長の水谷實造氏（中央）。武田春海副総裁（左）と名人位に挑戦した高根冨士雄5段。

前列左からマリンガの神信次郎、クリチーバの番匠外喜雄、ロンドリーナの杉本六郎氏ら3ベテラン。

左から吉川長門実行委員長と川合昭現理事。

右から小原祈井護士、中野秀敏の現連盟顧問と青木幹旺現名人。

**誰と誰でしょう。**　みな若かった。黄色は後の蔵相大臣となった植木茂彬。前列右から11人目。バックの建物は当時、日本映画の常設館といわれ、藤原義江テナーのリサイタル、日本の有名人の講演会等が行われたイタリア・クラブで今はない。現在は東西を結ぶ幹線道路が通っている。（一九五九年頃）

## 思い出のアルバム

**第10回（1957年）大会開会式**
右から植木茂彬、ブラジル・シャドレス連盟代表、山本勝造、岩崎岱治、中林武衛、新田健次郎、木村岩男、鎌田の諸氏。

## アトラクション

レブレーザ連合会少年少女の躍動的な「阿波踊り」が保存会の熱演によって並み居る招待者を和ませた。

米本圭月巳流三味線教室の二、三世の子供たちも参加しての熱演。真摯な姿が印象的だったが、終わって招待者の拍手が惜しみなく会場を圧した。このアトラクションは下本八郎州議員の厚意によるものでした。

イグアスー滝をバックに大山名人夫妻（1975年）

## 思い出のアルバム

マリンガの植田さん（右二人目）の案内でイグアスー滝観光の一コマ。

## 思い出のアルバム

**第19回（1966年）大会**
戦いすんで日が暮れて…老中先生より優勝盃を受ける柄沢喜美雄新名人

# ブラジル将棋連盟　歴代会長

第１代　山本勝造　１９５５～１９８５
第２代　水谷寅造　１９８５～１９８７
第３代　平川茂　１９８７～１９９１
第４代　中林昌夫　１９９１～１９９３
第５代　大河内三郎　１９９３～１９９５
第６代　内海博　１９９５～

## 一九九七年度　役員会

名誉顧問　下本八郎
同　小原祈
同　笹崎孝作
相談役　武田春海
名誉会長　柄択喜美雄
師範　烏山久夫
会長　内海博
副会長第一　吉川長門
同　第二　中田定和
専務理事　青木幹旺
会計理事第一　吉田国夫
同　第二　青山昭
公定書記（ポ語）　中野秀敏
同　（日語）　田畑三郎
書記理事　仲美好
渉外担当　河合昭
広報担当　松原富士六
理事　大原勝重

理事　橋浦行雄
〃　安部和夫
〃　鶴隆義
〃　嶋田秀生
〃　斉藤広
〃　新川一男
〃　小柴隆俊
〃　舟橋助治
〃　桑原南
〃　鈴木進
〃　黒川靖之
〃　浜井幹男
〃　江崎勝志
〃　板井清

ブラジル将棋名人戦五十周年記念大会実行委員会

大会名誉総裁　高木ラウル
同　副総裁　下本八郎
大会総裁　柄沢喜美雄
同　副総裁　武田春海
　　笹崎孝作
連盟会長　内海博
大会実行委員長　吉川長門
委員　中田定和
　　大原勝重
　　安部和夫
　　松原富士六
　　仲美好
　　柳生弘

鶴隆義
新川一男
小柴隆俊
船橋助治
福沢哲男
山本和夫
鎌田勇雄
中林昌夫
角田斉
青木幹旺
橋浦行雄
中田忠志
川合昭
森永直義
斉藤広
板井清
桑原南
吉田国夫
嶋田秀生
中野秀敏
吉川浩

## 全伯名人戦優勝者一覧表

第１回（１９４８）　中林次男
第２回（１９４９）　中林次男
第３回（１９５０）　山内弥市
第４回（１９５１）　中林次男

第５２回（１９５２）　中林次男
第５３回（１９５３）　中林次男
第５４回（１９５４）　中林次男
第５５回（１９５５）　中林次男
第５６回（１９５６）　中林次男
第５７回（１９５７）　中林次男
第５８回（１９５８）　中林次男
第５９回（１９５９）　中林次男
第６０回（１９６０）　中林次男
第６１回（１９６１）　前田克俊
第６２回（１９６２）　青木幹旺
第６３回（１９６３）　青木幹旺
第６４回（１９６４）　三浦栄二郎
第６５回（１９６５）　三浦栄二郎
第６６回（１９６６）　柄沢喜美雄
第６７回（１９６７）　大原勝重
第６８回（１９６８）　豊田桂吾
第６９回（１９６９）　青木幹旺
第７０回（１９７０）　三浦栄二郎
第７１回（１９７１）　大原勝重
第７２回（１９７２）　平川正
第７３回（１９７３）　大原勝重
第７４回（１９７４）　大原勝重
第７５回（１９７５）　大原勝重
第７６回（１９７６）　木庭元章
第７７回（１９７７）　玉城パウロ
第７８回（１９７８）　得永寛
第７９回（１９７９）　渡辺健治
第８０回（１９８０）　大原勝重
第８１回（１９８１）　安部和夫

第３５回（１９８２）　三浦栄二郎
第３６回（１９８３）　渡辺健治
第３７回（１９８４）　舛永一郎
第３８回（１９８５）　大原勝重
第３９回（１９８６）　三浦栄二郎
第４０回（１９８７）　青木幹旺
第４１回（１９８８）　吉田国夫
第４２回（１９８９）　青木幹旺
第４３回（１９９０）　青木幹旺
第４４回（１９９１）　青木幹旺
第４５回（１９９２）　青木幹旺
第４６回（１９９３）　湧口美裕
第４７回（１９９４）　大原勝重
第４８回（１９９５）　青木幹旺
第４９回（１９９６）　大原勝重
第５０回（１９９７）　青木幹旺

名人戦５０年大会
日伯毎日新聞より抜粋

参加９歳から９０歳まで
５０回大会　根強い人気を証明

今年もニューヒーローの出現はなかった。コロニア４大タイトル棋戦で最も歴史と権威がある将棋の第５０回全伯将棋名人戦（主催・ブラジル将棋連盟、後援・邦字三紙）が地元を始めパラ、サンタ・カタリーナ、南マト・グロッソ、ミナス・ジェライス、パラナの各州から１６５人の棋士が参加し、二十四日午前九時半から、愛知県人会館で行なわれた。

五段以上１６人によって競われた注目の名人戦は、昨年の覇者、青木幹旺六段がミナス・ジエライスの強豪・高根富士雄五段を降し昨年に続き通算十回目の優勝をかざった。同六段は、実戦の雄といわれ、各棋戦の優勝回数を２９回と延ばしたコロニア棋界の第一人者、記録更新もさることながら、後輩の指導に余念がない。７５年、大山康晴名人が来伯し、各地にて指導対局が行なわれたが、名人を「ううん」と鳴らせた唯一のコロニア棋士。現在は連盟の専務理事の要職にある。当年６４歳。

## ６州から１６５人
## 青木六段が優勝

半世紀の歴史を刻む今回の記念大会には、９歳から９０歳の超ベテランまでと幅広く、近来になく多くの棋士が出場、また、非日系人の参加もあり、根強い将棋人気を証明する大会にもなった。

最近の棋戦では、高齢者ばかりと陰口を叩かれていたが、今大会には若武者棋士の出場も多く大会を大いに盛り上げた。

最年少棋士は、父親と共にミナス州サンジョアキン・ビッカス市から出場の浜公志郎君（九つ）。将棋を習い始めて約四カ月の豆棋士は、祖父ほど年齢の離れた大人に混ざり初段・段外混合戦に出場するも経験の差は如何ともしがたく零勝五敗と初陣を飾れなかった。

一方、最高齢者はバルゼン・グランデ・パウリスタ市からの大谷参雄三段。小学生時代に「軍人棋士」で将棋の楽しみを覚え、棋歴は実に８０年。三段戦では予選突破はならなかったが、二年前の全伯将棋老中戦で予選を勝ち抜き、８８歳で昇段という偉業を成し遂げ棋界を驚かせた。

各段の成績は次のとおり。

【名人戦】

優勝＝青木幹旺六段、２高根富士夫五段、３吉田国夫五段、４玉城パウロ五段。

＊青木六段（６４）、聖市。商業。

【４段戦】

１神信次郎、２山中好雄、３野見山康則、４藤本春美。

＊神四段（７３）、パラナ州マリンガ。農業。

【３段戦】

１高野勇治、２嶋五郎、３川波員俊、４松木国比古。

＊高野三段（３１）、パラ州ベレン。在ベレン日本総領事館勤務。

【２段戦】

１井田王人、２結城健次、３柴山海蔵。

＊井田二段（６９）、聖市。タクシー業。

【初段・段外戦】

１志田昌昭、２紺野昭、３土谷密。

＊志田初段（６５）、聖市。

優勝した青木幹旺六段

## 一つの通過点
## 将棋連盟が記念式典

また、名人戦前日の２３日午前１０時から、同会場でブラジル将棋連盟創立５０周年記念式典が多くの来賓と将棋愛好者を迎えて行なわれた。

挨拶に立った内海博会長は「５０年は一つの通過点に過ぎない。この地に日本文化の一つである将棋を伝承して行くのが我々の役目」と述べ、さらに「来年は日本移民９０周年。日本の公式タイトル戦の一つをブラジルで開催する計画を持っている。国際交流基金のバックアップも期待出来る」と明かした。また、高木ラウル式典名誉総裁（本紙社長）も「今年の名人戦５０回記念大会に専門棋士の派遣を日本将棋連盟に要請したが、時間的な問題で残念ながら実現しなかった。来年は名人を招聘したい」と大きな報告。この後、中林昌夫元会長が『コロニア名人戦の歴史』と題して「終戦直後の混乱期に、将棋という緩衝地帯を設けコロニア明朗化の一助になれば、との考えから発足したのがブラジル将棋連盟。当時は大きさも不揃いの駒で、足りなければマッチの軸で代用したもの―」と当時を振り返る。

## 思い出の人々
## コロニアの最古老戦
## 柄沢幸之助老

明治八年（一八七五）生れ、九十六歳。一世紀近くも生き抜いてなおかくしゃく、将棋を余生最大の娯しみとし、興に

乗れば徹夜も辞さない愛好ぶりには驚嘆せざるを得ない。棋力も強く、お年に似あわず攻撃型、みずから手を創り敵陣にゆさぶりをかけ、一発必中の鬼手を生んで敵王を追いつめるさまは若いころの片鱗を十分にうかがわせる。ただ近来は視力が弱り見落しが出るのは止むを得ない。

渡伯は明治四十三年、第二回移民「旅順丸」。モジアナ線で十年ほどコロノ生活を送り、一九二一年ソロ線ア・マシャード駅に転出、そこに腰を据えて農業に従事すること四十五年、末子の喜美雄（元名人）四段の出聖とともに一九六四年にサンパウロ市に出る。現住所はアクリマソン区カストロ・アルベス街六五四番十一階。

子宝は七人（女一、男六）、孫、曽孫は数えきれないという。

一九四〇年にマシャード市に始めて呉服店を開業、順風満帆の勢いに乗って拡張をつづけ、現在は全伯各地に十二の店舗を持つ。次男の登治氏（三段）が昨年急逝したのが惜しまれる。

翁の百才達成を記念して盛大な将棋大会を催す日がくることを祈ってやまない。

長野県上水内郡古里村出身

将棋人名録「王将」より
（ブラジル将棋連盟１９７１年発行）

## なつかしき日々

### 橋浦昌雄老

明治十一年（一八七八）生れ、九十三歳。柄沢翁とならび棋界に輝く二つの星、いや全コロニアに誇り得る高齢者だ。

聴力はやや衰えたが視力、脚力なお強く、美髭を貯え温顔に笑みを絶やさぬ姿は中国でいう“老大人”そのもの。三十年ほど前までは「全伯一の実力者」と謳われ、高い見識はコロニアの指導者として一般の敬意を受けていた。隠居して社会の第一線より退いたのちは将棋を友として棋界の発展に尽力して来られている。百歳の線を突破されるよう祈ってやまない。

鳥取県岩美郡大岩村の村長の職にあったが、昭和二年アリアンサに鳥取植民地を造成するため先駆入植、のち産業組合を設立し、理事長として在植者の福祉のため全精力を傾注した功績はだれひとりとして知らぬ者はない。

従弟に南支那派遣軍司令官をした西尾寿造大将がおり、同

**コロニアの最古老戦**

橋浦　昌雄老

柄沢　幸之助老

大将の南米進出の抱負を知り各地を視察して歩いたこともあったが、大東亜戦の悲しい終結とともにすべてご破算、情熱はしぼんだ。戦時中はアラサツーバで七年、パウリセイアに四年、のちサンパウロ市に出て現在に至る。

子供は上四人が女、下の男が行雄氏で二段、研究会会員である。

## 山本勝造さんのことども

サンパウロ人文科学研究所

宮尾進

一昨年亡くなられた山本勝造氏について書いて欲しいとの依頼を受けましたが、山本さんはブラジル将棋連盟の元会長で、その後も確か亡くなられるまで名誉会長をしておられたのと同時に、私たち研究所の会長でもあったところから、そういう御指名となったものと思われます。

将棋連盟と山本さんのつながりを良くは知りませんが、会

第20回（1967年）大会の開会式のスナップで右端は内海博現会長。左端は笹崎孝作顧問と右から山本会長、水谷寅造実行委員長、岸節美副会長

長時代には連盟を育てるために随分と骨を折られたということを会員の方から聞いたことがありますが、山本さんご自身が将棋を指しているところを一度も見たことがありませんので、いつか不躾にも、「山本さんが連盟の会長をされたとは知りませんでしたが、ご自身では将棋をおやりにはならないのですか」と聞きましたところ、「バカ言いなさんな、これでも僕は五段をちゃんと持っている」と申されました。が、そのあとすぐに、「もっともこれは会長として余り段位が低いとまずいので、おなさけに戴いた名誉五段だがね」と云われたのを覚えています。私たちの研究所でも、蜂谷専一会長の亡くなられたあと、一九八〇年から第三代目の会長として、十五年の永い歳月を務めていただいたわけですが、「学者研究者でもない私が人文研の会長に推されたことは要するに、研究するための金を作れということなので…」と、よそからの訪問者に対して冗談まじりに度々口にされていましたが、おそらく連盟の会長も同様だったでしょうが、自分が会長に推戴されたことの真意を十分に意識され、会長だからといってさし出がましい指図は一さいせず、自分の職分を心得て会長職を務められたといえると思います。コロニアのいろいろな団体の中では一番に貧しく、地味な研究活動を続ける私たちの研究所が今日までやってこられたのは、何とかその体制を維持するための山本さんの努力があったためといえます。亡くなられる最後まで、研究所のことを心配しておられたのは、まったくお金のことには疎い私たち研究所関係者の行く末を慮ってのことであったと思われます。

山本さんはコロニア生え抜きの実業家であったことは、コロニアの方々の熟知するところです、その事業も単なる金もうけの手段としてではなく、「その経営理念は『ブラジルの産業発展のためにつくす』ということであり、事業の目標を『ブラジルにないものを作ること』とし、私利よりもブラジ

ルの国益に高い価値を置く。そしてブラジル工業化の生成期に遭遇したことを幸運と考えていた」と、山本さんの企業家としての生き方を書いた小池洋一さんは記しておりますが(注)、そういわれれば「百姓の落第生」と自ら称していた山本さんが、あの日伯合弁によるセラード開発プロジェクトの中で、セラード農業開発会社の「サンタ・マリア農牧」の社長としてその開発に一時激しい情熱を燃やされたのも、「ブラジルのため」という国益に結びつけた新しい事業の理念があったためのものと思われます。

しかし、話は余談になりますが、このサンタ・マリア農場で、その経営に陣頭指揮をしておられた頃、「農場の中の豊富な湧き水を利用し、水田を作ったのだが、すぐ隣のコチア青年の農場では、同じ水を利用した畠の稲が豊かに実り、一度収穫したあと、もう一度水を張って切り株から再び出た稲で二度も収穫が出来るのに、うちの田は水をひいてもその水が枯れて、稲がどうもうまく育たない。　そこで、グァタパラの米作りの専門家に頼んで見てもったところ、種子を播く前十分に代かきをし、水が漏らないように泥を塗り込むようにしなければ、と教わった」という話を山本さんの口から聞いた時、それくらいのことは私でも知っているのに、やっぱり山本さんは若い時から昭和初期の彼の有名な鈴木商店で育った根っからの商人なのだなと思ったことでした。そのようにあの人としては全く思いがけない稚気愛すべきといいたいところもあるひとでしたが、小池氏の書いているように、「ブラジルになかったことを初めてやる」「ブラジルのために」といった事業への動機は、いかにも明治の日本人らしさをもった戦前移民の人たちの心意気を備えたもののひとりであったと思います。

ここでフト、「マカコ・ヴエーリョ」という言葉を思い出しましたが、昔はコロニアにも「マカコ・ヴェーリョ」と呼

ばれる人があちらこちらにおられました。「マカコ・ヴェーリョ」とは辞典を見ますと、必ずしも良い意味ではなく、老猿のように賢くぬけめのない人をいうこともありますが、経験豊富で明敏な洞察力のある人という良い意味も記されています。明治生れの戦前の移民の人たちの中には、このような鋭敏聞達、意欲旺盛に活動していた人たちがいく人もあったように思います。

山本さんの昔はよく知りませんが、人伝てに聞くところによりますと、血気盛んなころは勇ましくひとと渡り合い、「山勝」の名で広く知られたということですが、そうした姿を追想してみると、やはり山本さんも、いまでは懐かしい過去のものとなってしまった、コロニアのマカコ・ヴェーリョのひとりであったという気がして来ます。才気があり、鋭敏な判断力があった一面は、度々新聞に書いておられた短い文章一つ見ても、よくわかることでした。あれだけ短いスペースの中で自分の考えをまとめるということは余程の文才と、綿密な思考力がなければなかなか出来ることではありません。コロニアでは珍らしく筆のたつ人でもありました。

最後に、明治の人らしいといえば、その生活も質実剛健というか、お金があるにしては簡素質朴なものでした。「わしは腹がくちくなればそれでいいんじゃ」という言葉を聞いたことがありますが、衣食はこと足りればそれで十分という生活態度で、一緒に旅に出て食事時になると、道路わきの安レストランで毎度「コメルシアル」と注文されるのには、旅さきではその土地のなるべくうまいものを食いたいと思っている私には、ほとほと閉口すべきことでした。しかし吝嗇というのではなく、仕事柄多い日本からの来客、日本でも高価な珍味をみやげに携えて来られたものを、先輩友人で病床にある人でもあると、自分では口にせず惜し気もなくこれをお見舞にとどけて欲しい、と持って来られました。「こんなうま

いものは、オレならやっぱり自分で食べてしまうだろうな」とその度に感心したものですが、こうした生活態度はまったく私ごとき軟弱な人間のよくするところではありません。

時がたち、日本移民の歴史も九十年を数えるようになった今日、こうした明治の心意気をもつマカコ・ヴェーリョと敬愛される人たちも、私たちの周囲からは消え去って見られなくなり、その言葉自体がコロニアでは死語となってしまったことは、まことに寂しいことに感じられます。

（注）小池洋一「ブラジルにおける一日系人の企業者活動―山本勝造とその経営理念―」アジア経済第三一巻第一号、一九九〇年アジア経済研究所

## コロニア将棋半世紀
### ―輝く功労者群像―

中林昌夫

１９４９年、日伯毎日新聞社の企画によって「全伯将棋名人戦」が創設されて５０年目を迎える。正確にいえば、４８年にパウリスタ新聞社主催で、第１回大会が行われている。

正に半世紀である。貴い数字であり、節目を祝う有意義な年にあたるので日本将棋連盟からプロ棋士2名を招いて、コロニア将棋５０周年祭が催される。記念事業として「棋士住所録」と「５０年史」を刊行するといので、双手を挙げて賛成した。

過ぎ去った５０年という永いコロニア棋界を振り返ってみて、記憶も薄らいでいることであるが、内海博会長より表題を示されてみると、何か恐ろしいものに取り組むような感を抱いたものであるが、創刊当時の“日毎紙”を繙いて、私なりの棋史の一端を綴ることが出来ることを願って、ペンを執った次第である。

（文中の年代は総て西暦で算用数字を用いた。その他の数字も出来るだけそれに準じた。）

中林武衛氏

私事にわたるので、いささか気がひけるのだが、将棋のコロニア導入は、父・中林武衛と時の名人・木村義雄氏との文通によって始まった。父と名人との出会いは、在日当時、私たちの住んでいた町（茨城県新治郡石岡町・現石岡市）において同好者たちが名人を招待したことがあり、その指導対局が、次の写真なのだが、飛車落なら入らないが、飛香落なら“分”があったというから、今も昔もアマとプロのハンディの差は変らないものなのだナと思ったことである。

父は、ある時、次男兄の弟子入りを名人に懇願したことがあるが、「プロになれればいいが、反対の場合には、人生を棒にふることも考えられる」という話で、父も次男のプロ入りを断念したという。次男兄が１６才の頃で、いま考えても、愚問の域を脱していない憾みが残った。

ご存知の向もあろうかと思うが、名人は非常に親孝行な人

で、終戦直後日本の友人、知己に贈った救援物資の中の白砂糖は、特に貴重で喜ばれたそうだが、甘党の父君に小皿に入れてそのまま出したところ、涙を流して喜んだという礼状が届いたのには驚きであった。

礼状は見ればみるほど、麗筆そのものであった。当時の私には、その筆跡を読みこなすほどの力はなかったが、後年、またその機会に接して、一気に読了した思い出がある。

そういう関係で大成会（現・日本将棋連盟）のブラジル支部の認可を得て名人戦に続いて老中棋戦、王将戦、最強棋戦などが花開き、今日の全伯４大タイトル戦が誕生したのである。老中とは、父・武衛のペンネームで、老中先生の遺徳を永遠に偲ぼうというところから、亡くなった翌年に創設された。棋戦の内容は、よく口にした「低級者にもタイトル戦に参加できるチャンスを創りたい」という意向が、奇しくも自らの名を冠した棋戦となって現存していようとは夢にも思っていなかったことであろう。対局法は、１段差香落から６段差６枚落という前代未聞の上位に辛く、下位に甘く、どうしても下位者が勝てるという駒割制が採られているが、未だに下位者から優勝者が現われず、父の悲願は未だに達成されない。恐らくあの世から下位者に声援を送り続けていることであろう。

１９７２年１月１４日、老衰のため死亡。享年８０。本籍は、茨城県西茨城郡岩間町押辺。

山本　勝造氏

この人を抜いて将棋は語れない。

戦前、岩崎岱治氏（後の連盟副会長）宅にメルカード近辺に住む同好者達が集まり、将棋を楽しんだのだが、中林老中

先生との出会いで、当時はいずれも二枚落であったというから、いかにコロニア将棋のレベルが低かったかが窺われるのである。サンパウロ棋界の揺藍期といっても過言でなく、名を「天狗クラブ」と称した。

その頃ようやく、ブラジル将棋連盟結成の機運が高まり、５５年６月に創立した。初代会長には山本さんが推挙されたが、氏はなかなかウンといわない。「私は弱いから」というのが理由だったそうだが、岩崎氏から「山本さん、将棋は下手でも、会長は務まりますよ」「ヘエ、そんなもンですかね」という有名な話が残っている。

まずは山本内閣の誕生となり、第一着手は日本将棋連盟を通じて烏山久夫アマ４段（当時）の招聘である。これが５８年に実現した。続いてプロ棋士の招聘。その人選については、度重なる理事会において、まず升田幸三元名人、大山康晴前名人の二人にしぼられた。理事の大半は升田に傾いていたのだが、ひとり山本会長は「いや、升田さんは、話しが巧みで、独創的な棋風は魅力十分だが、一般的ではない。大山さんは、升田さんとは対蹠的な方で、人間性豊かで、苦労人で、しかも外国を識っている国際人と思われる」の一言で大山さんと決定した。その交渉に、社用で訪日が決っていた私が選ばれたのだが、理事の中からいま日本将棋連盟では東京会館建設中であるから、貧者の一灯として５万円を寄付し、あいさつ代りとすれば、敷居も低かろうということであった。当時の５万円は、当連盟の予算には容易ならざる金額であったが、それでも若い理事連は「何とか工面しよう」と意気盛んだったことも嬉しかったが、ここでまた、会長より「個人ならいいが、５万円は見窄らしい。伯将連はいかに小さくとも、団体としてのお付合いには何とも淋しい。５０万円ができなければ私が立替えよう」の一言に一同唖然としたが、それが大人の知恵というものであろうか。衆議一決、

私は敷居が低かろうからいくら高くとも‥となり、勇躍訪日したのであるが、ある日、大山先生に招かれて、赤坂東急ホテルで初会合となり、伯将連の現状の一部を申上げて、まず当方の条件として①ギャラなし②夫人同伴のこと③滞在費ブラジル側負担④旅費ブラジル側負担（但し、昌子夫人の分は日本側負担）を提示したところ、先生はちょっと間をおいて、ハッキリと「解りました」といったが、その一言は終生忘れることができない。

ここで紙数が切れてしまったので、この事については山本勝造著「ブラジルと四十三年」に詳しく書かれているので省くが、終戦時のコロニアの時局収拾に思いを馳せ、老中先生と手を携えて、コロニア将棋の確立に奔走されたことは、万人の認めるところ。

氏はブラジル将棋連盟会長（在任３０年）の他に、ブラジル日本文化協会理事、サンパウロ日伯援護協会理事、ブラジル日本商工会議所専任理事、サドキン電球工業社長、ニッポン・カントリー・クラブ会長、サンパウロ人文科学研究所理事長、セラード農産出資会社社長の肩書を有し、７１年１月「コロニアに４０年」から「ブラジルと６１年」まで随想集を９冊刊行、鋭い批判と風刺は、麗筆もさることながらコロニアの大方から称賛された。

兵庫県姫路市出身。９５年８月２２日心不全のため死去。８６才だった。

岩崎　岱治氏

サンパウロ市の「天狗クラブ」創始者。メルカード近辺の同好者に自宅を提供して、将棋を楽しんだという記録があるが、老中氏はじめ山本勝造、高木秀雄、青木忠三郎、新田健

次郎、中田清、山口茂、鎌田登、青木幹旺（現名人）などの諸氏が交流の場として親交を深めたのが、４８年ごろであったろうか。これが将棋クラブという組織化された団体の嚆矢であろうと思われる。後に連盟結成の機運に繋がったことといっても言い過ぎではない。

こと将棋に関しては、氏の辞書には「ノー」という言葉はなかった。どんな小さな仕事でも、大きなことでも先頭に立って、自分の木工所を会場に充てて将棋会を催し、駒が足りなければ、補充に走り、将棋盤も作った。いま研究会で使っている将棋台は氏の手になるもので、青木現名人が「これも岩崎さんの遺品です」といっていたが、今だにビクともしない逸品である。

４８年、パウリスタ新聞社主催第１回全伯将棋名人戦が「旧ときわ」において開催された。名人戦は、総当り制であったが、第１回大会であるので名人がいない。その最高位を賭けて、地方予選を勝ち抜いた一線１代表の６人の争覇であった。

一般棋戦も併催され、Ａ組の優勝者が岩崎さんで、Ｂ組が私、共に全勝というので、同率決戦となった。私は顔見知り程度だったが、Ａ組だから強かろう、老中先生の息子だから手強かろうという、駆け引きの下に居飛車戦法で開始されたように記憶する。隣の部屋の名人戦の寸暇を割いて、私たちの将棋をのぞいて父・武衛が「ひどい将棋だな」とつぶやいた声が耳底に残っている。その結果は、どちらに軍配が上ったのか、信憑性に乏しいので、二人のために伏せておく。

これは、いつも聞こう聞こうと思っていたことだが、岩崎さんの子息は一人として将棋を嗜なむ者がいなかったのだろうかという疑問が残っているが、それが先刻、次男の秀雄（東京都友会会長、日本都道府県人会理事、ブラジル・ゲートボール連合会副会長）さんと電話で話す機会があったの

で、それを質すと、「私も将棋は好きでしたが、勉強に追われて、将棋どころではなかったが、日毎紙連載プロ将棋欄は欠かさずに見ていた。特に中盤からの作戦の岐れ目からの解説は面白くて毎日が楽しかった」というから、棋力も相当なものであろうと思われる。

岩崎一家の渡伯は３５年で、貨物船はわい丸は、シンガポールからコロンボ経由で荷積み降しのためアフリカ沿岸の各港に寄港しながらケープタウンから一路サントスへ向う航路で６０日以上を要したという移民政策の全盛期といわれた時代。

その無味乾燥な航海中に前甲板と後甲板の対抗将棋大会が開かれたが、岩崎さんが優勝の栄を勝ち取ったという。

昭和初期の聖戦を謳った軍閥華やかりし頃入隊、身体検査に落ちると「この不忠者め」とびんたを張られた時代であったが、身体強健で百七十センチの上背は、試験官から「日本人ここにあり」の甲種合格の印を捺され、近衛連隊直属の軍人となったのである。

そういうことから、陛下の出迎えから、行幸にはお伴に駆り出されたこともあったというから、岩崎さんにとっては、陛下はめずらしい存在ではなかったのであろう。

氏は東京都出身で、事業は木工所を手広く営んだ。老衰のため８０年２月１０日、８４才で没した。

烏山　久夫氏

この人も、当連盟にとっては貴重な人である。

連盟結成が５５年で、その第一弾として、専門棋士の招へいが企画された。人選は日将連に委ね、ブラジル将棋の指導と、大きくは棋界発展のために貢献できる適任者として烏山久夫アマ４段（当時）と決まった。

氏は早稲田大学将棋部の副将として、主将の木村義徳４段（元名人・義雄氏の次男で、後にプロ８段）と共にプロを目指した。ご承知のことと思うが、日本将棋連盟の奨励会（プロ養成所）を卒業すると、４段を頂戴してプロとなるが、「烏山さんはアマだから、我々も何局か指す内には一局位は入るのだろう」とタカをくくっていたのであるが、いざ対局してみると、全然歯が立たない。時の中林次男名人すら「５番に１番入ればいい方だ。プロとは、これほど強いとは……」と述懐したことがある。

烏山さんはアマなのだが、プロの水の辛さを知っている勝負師で、そんじょそこらの有段者とわけが違う。ある時、柄沢喜美雄氏宅において指導対局が行われた。相手はコロニアのトップ街道を驀進中の青木幹旺現６段である。棋勢は青木６段有利に展開し、序盤の指し易い局面から、中盤の優勢へと持続し、終盤の勝勢へとつなぐ局面で、烏山師範が長考に入った。プロの大山名人が０３・２４時間、加藤治郎八段が、０６・４７時間というのが最高記録であるという。古くは坂田三吉８段の第一着に０８時間考えたという寓話があるが、この対局は、それを上回る０８・３０時間に及んだのだ。

勝負に妥協はないというのはプロの世界だが、考えられるのがプロというものなら、それを考え得たのだから、その根性と片鱗をまざまざと見せつけられた思いがした。その一手が勝利に結びつけた一手となったのであろうか？　そして烏山師範が勝った。

烏山さんは、指導することが苦手のようで、下手に飛を落して、初手は２六歩か７六歩の筈だが、８六と角の頭の歩を突いて悦に入り、ひとり嬉々として戯むれるのである。「酒が強くなると将棋も強くなる」とよく口にしたが、彼もウイスキーを盤側において対局中に空にし、長引けばもう一本という調子。酔えば酔ったで、名調子カラオケともなり、早稲

田大学在学中の話に花が咲くが、勝負に酒に強いのは、師範の哲学なのか、或いはノウ・ハウなのか、窺い知れない強靭さがある。正に酒豪というべきか。

プロの世界でも、碁打ちの将棋は二、三段程度だが、将棋指しは碁の五、六段の力を有し、タイトル戦の前夜祭には、碁を打ち、麻雀をして勝負感を養う？　などと言われている。師範は碁も強い。将棋に敵なしで、碁に転じ、各棋戦にコロニアを代表して気を吐いているが、中国、韓国の強豪を相手に互角に戦える実力者は彼をおいて他にいないというのがコロニア棋界。そういう意味から二刀流の勝負師として、ブラジル棋界に一エポックを画した貴重な存在である。

ブラジル在住３９年のコロニア人である。当年６４才。

柄沢　喜美雄氏

ご存知ＣＡＳＡＳ　ＫＡＲＡＳＡＷＡの総帥で、コロニア呉服業界の雄である。父君・幸之助老は、長野県の産。明治４３年第２回移民船「旅順丸」で渡伯している。第１回笠戸丸の２年後で、８７年前のことである。

当時、行李の底に将棋の駒を入れてきたかどうかは知らないが、家族と共に海外雄飛に目覚めた県出身のブラジル移民第一号である。

喜美雄氏は、６男１女の末子で老父が無類の将棋好き、教えられるまでもなく、駒の動かし方を身につけ、２０才ごろからか、特に次兄の登治３段とは好敵手で、暇をみては駒を手にしたという将棋一家である。

氏は、石橋をたたいて渡る性格で、棋風も攻めよりも守りで、自ら転ぶことも少ないが、棋勢の進展に伴う“ここで一発”がないので、大魚を逸することもあり、華やかさはないが、第１９回（６６年）名人戦と第５回（７６年）老中棋戦

に優勝した。当時、二世で頂点に立ったのは異例で、棋界に爽やかな新風を送ったということで注目を浴びた。
後に解ったことだが、日伯両語とも自在で、座右に専門誌をおいて、定跡（セオリ、ｔｅｏｒｉａ）の研究に没頭し、秘かに全伯をねらったであろうことも窺い知ることができる。
現在の連盟にとっては一肌でも二肌でも脱いでくれる大久保彦左的な無くてはならない存在である。事業を縮小し、老後の今、世界漫遊を楽しんでいる。両親を初め、兄姉の６人を送り出し、天涯一人ぽっち。きょうもまた、研究会で安部５段との定期戦を戦われていることであろう。当年８０才。

## 私の将棋歴

青木　幹旺

一九三四年、私は一才の時に両親に連れられてブラジルに移民して来ました。準二世と言うよりも、二世と言った方が、適切かも知れません。十才の時に、イタケーラに入植し、養鶏（ヨーケイ）をすることになりました。ヨーケイ（余計）儲かるかと思いきや、生活状態からするとそうでもなかった様です。
十三才の時に、母を亡くし、学業を断念し、養鶏業を手伝うことになりました。朝は朝霧、夕は夜霧という言葉がある様に、当初の一般的な移民の苦労も味わいましたが、母親の居ない寂しさも、同時に身に染みたものです。
父は田舎の将棋三段とのことで、いつも将棋駒を並べて、一人で試行錯誤を重ねていました。
十五才になりましたが、当時は娯楽はないし、若くて身体が元気でしたので、柔道を習い始めました。しかし、昼間は重労働をした身体に、柔道をするものですから、疲れから身

体が思う様に動く筈がありません。技を掛けた瞬間に、足首を捻挫してしまいました。仕事も柔道も出来ず暇を持て余していると、父が「お前に将棋の駒の動かし方を、教えてやろう」と言って、私に有無を言わせず、将棋盤を持って来て教え始めました。父には、大好きな将棋ですが、私にしては、あまり興味はないし、退屈しのぎという程度でしたので、上達する筈がありません。

更に、「バガブンドになるから…」という母の言葉が耳に残っていましたので、上達しないこと、おびただしい。父親も教えるのを一時断念した程でした。しかし、娯楽らしい娯楽もないまま、自然に手は駒の方に行く様になり、十七才の頃には、父親と対で指すまでになっていました。

これならサンパウロ大会に出場しても「恥ずかしくないだろう」と父親のお墨付きを貰ったので、初めて出場という筋書きが出来上がったのです。当時は、段位制ではなく、強い順からA組、B組、C組となっていました。私は若かったので、少し遠慮してB組で出場しました。結果は…八勝三敗で、準優勝。その大会で老中生・中林先生にお会い出来た上、先生から手ほどきをも受ける光栄に浴したのです。

飛角2枚落ちで指して戴きましたが、二勝二負の成績でした。更に私を有頂天にさせたのは、先生のお言葉でした。「定跡も禄に知らないこの小僧は、将来必ず、コロニア将棋会の名人級になるぞ」。天にも昇る気持ちで帰路についたことを、昨日のことの様に思い出します。

それから二年後、サンパウロ市カンタレイラ街のメルカードで、果物関係の仕事をする様になりましたが、仕事が忙しかったので、将棋駒を手にすることはありませんでした。

二十一才の時に、メルカードにも「と金会」という将棋仲間の会が結成されたのを機に、再び駒を手にする様になりました。「と金会」では、老中生・中林先生と角落ちで互角の

勝負をする様になっていました。二十二才の時に名人挑戦権を獲得し、先生のご子息：中林次男名人に挑戦しましたが、結果は無残にも〇勝三敗で敗退し、無念の涙を呑みました。それから四年の歳月が流れ、再挑戦しましたが、又も〇勝三敗という不成績。昔の大会は3日制で、予選を勝ち抜いた者が、名人への挑戦権を獲得し、それから名人との五番勝負という規定になっていました。リーグ戦を戦い抜き、精根尽き果てて挑戦権を獲得した後に、十分に休息を取っていた名人に挑戦するのですから、そのハンデキャップは、想像に絶するものでした。只でさえ強い名人は、ゆっくり構えていれば良かったのですから、そういう所から挑戦制を廃止して、選手権制を採用することになり、名人も最初からリーグ戦に参加するという様になりました。

その頃、烏山久夫師範が、コロニアの将棋指導に来伯され、神戸アマ王将であった前田克俊五段も、移民として来られました。これを契機とし、コロニア将棋界が、活況を呈する様になった訳であります。

何回目かのサンパウロ名人戦で、前田五段が、中林次男名人を倒し、私が前田五段に勝って第四代名人となりましたが、その時は、二十九才でした。私は、三段でしたが、名人位と四段位を授与され、二重の喜びに浸ったものです。今考えますと、私の将棋人生で、この頃が心身共に最も充実した、最強の時期ではなかったかと思います。

二十九才、三十才、三十三才と三回名人位を獲得したので、安心したのか、将棋への意欲が薄れて、突然スランプ状態に陥ってしまいました。その後、暫くは泣かず飛ばずの時期を過ごしましたが、一人の悪友から「も早落ち目か、もう一度頑張ってみろよ」と檄を飛ばされたので、目が醒めた思いで、再び将棋に熱中する様になりました。

よく棋友から「青木さんは、毎日将棋の猛特訓をするので

しょう」と言われます。私が「練習も特訓も、殆どしていません」と答えると、怪訝な顔をされますが、事実なのだから仕方ありません。大会の二、三日前に、駒を少々並べるだけで、特別な練習はしていないというのが、実情です。

現在は、六十四才ですが、王将、最強者戦等、合計二十九回の優勝を果たし、現在に至っております。

私の拙い将棋歴を、座右としている先達の言葉で、締めくくらせて戴きます。

「辿り来て、未だ山麓」（升田幸三）

【写真は一九七五年三月、大山康晴名人ご夫妻がブラジルに第一歩を印したコンゴニャス空港。山本会長をはじめ伯将連の皆様が歓呼で出迎えた思い出の一枚である。（当時はサンパウロ国際空港と呼ばれた）】

# もっと将棋を指そう

サンパウロ市
今　村　　幸

ブラジル将棋連盟創立五十周年にあたり、衷心より御慶び申し上げます。

一九五八年に中林先生の御尽力により、山本勝造氏を初代会長として発足しました。

将棋普及運動の種々な催しの中に一九七五年には当時の大山康晴名人を招き、来伯されて、指導を賜わり、ブラジル将棋愛好家のレベルアップに御尽力下さいました。

私も将棋が大変好きなので、もうかれこれ三十年以上もお世話になっております。

最近は、コロニアの老齢化により、会員の方が益々少なくなっている事は誠に淋しい限りです。

先ず対策として思います事は、日本の将棋連盟との交流を深め、そしてブラジルの二世、三世又は、四世の若い層に呼びかけ、将棋の面白さを理解してもらう事でしょう。

日系青年の中にチェス愛好家は思ったより多く、レベルのかなり高いチェスマンも居りますから、その青年達が一度興味を持ったら、すぐに覚えることでしょう。

私は十五年間にわたり、サンパウロ老人クラブの会員の皆様を約一千八百人診察してまいりました。全然興味を持たない人にくらべ、毎日、将棋や碁をやっておられる人達との頭の老化現象の差がはっきりとしていることを知りました。

将棋愛好家の皆さん、これからも大いに将棋をやりながら、人生を楽しく生きようではありませんか。

(氏は、リオ医大卒、当年６９才。専門は耳鼻咽喉科で、サンパウロ老人クラブの健康を受け持っています。長い間の診

察によって、碁や将棋を嗜む人がボケを防ぐといいます。大いに打ちましょう、指しましょうと推奨しています。）

## ブラジル将棋の今昔

水谷　寅造

ブラジル将棋連盟、日伯毎日新聞社後援の全伯将棋名人戦が第五十回を迎え、その記念事業の一環として将棋人名録を作成し、過去の記録を長く保存することは誠に意義深い企画で当を得たものと高く評価するとともに役員諸氏に対し感謝し敬意を表します。

全伯大会は今年で五十年、随分と永い年月です。その間、多くの先輩諸氏が鬼籍に入っております。老中先生在世のころ、棋友の長老が物故したが、いま山内第三回名人や柳沼氏らが病床にあるときく、思い出しても感無量である。しかしいずれはおなじ蓮の露。悠々一堂に会して名人戦でも戦おうではないか。この言葉はいかにも棋友に対する深い思いやりに満ちていると思う。

顧みれば私も多年将棋で活動出来たのは、やっぱり将棋の醍醐味や名人戦の魅力によるところが大きかったと思います。

先ず最初に大会の様式ですが、コロニアを六地区に分けて、それぞれ予選を経て、その勝者を代表として出場させる仕組み。対局はリーグ戦、そしてその大会の優勝者が名人に挑戦し覇権を競う制度ですが、私はいつも抵抗を感じておりました。何故かと申しますと、本部の予選リーグを勝ち抜き挑戦権を握って、名人に挑戦することは、アマ大会の様式でないように思う。プロ棋士の場合はいざ知らず、アマ名人の場合は各地区代表と同様同じリーグで勝ち抜く制度が望まし

いといつも思っておりました。これは私の行きすぎた考えかもしれませんが。

それでは一回より十七回までの名人戦の経過を述べることにいたします。

第一回　一九四八年　名人　中林次男
第二回　一九四九年　名人　中林次男
第三回　一九五〇年　名人　山内弥市

挑戦者・山内氏は二連敗の後三連勝して堂々たる名人位を獲得した。

第四回　一九五一年　名人　中林次男

中林氏挑戦権を握り、山内名人を三対〇で破り再び名人位に返り咲いた。引続いて第十三回、一九六〇年まで十回連続名人となり、通算十二期名人の座を守った。

第十四回　一九六一年　名人　前田克俊
第十五回　一九六二年　名人　青木幹旺
第十六回　一九六三年　名人　青木幹旺
第十七回　一九六四年　名人　三浦栄二郎

ここで特筆したいことは、青木幹旺氏の連続名人に次ぐ三浦名人等の登場でブラジル将棋界が一段と飛躍したことを如実に物語る証左だと思う。

一方、十二期の名人・中林次男氏は現役を退き連盟の師範となり後進の指導に当った。常に蔭になり日向になり棋界の発展に尽力された日伯毎日新聞、特に当連盟育ての親ともいうべき中林老中先生に感謝と敬意を表します。

現今のような組織のない混乱期を、将棋界の神代時代といったころ、自称田舎初段とか、二段がザラにいた。本当の実力は問題でなく至ってレベルの低い天狗連中が集まって楽しんでいました。しかし、将棋は戦前より在留邦人にもっとも親しまれてきたポプラールな娯楽であったと思います。

一九五五年にブラジル将棋連盟が結成され、次の人々が初

代役員に選ばれ運営に当りました。
会長＝山本勝造、専務理事＝中林武衛、会計理事＝岩崎岱治、理事＝豊田桂吾、野尻定高、頼信晋、猪熊富雄、黒崎泰一郎。
それまでは戦前日伯新聞社、戦後はパウリスタ新聞社が引続いて日伯毎日新聞社が主催し、棋界の中心をなしていたのですが、それでは総ての点で不自由であった。殊に地方との連絡や日本将棋連盟への段位の認可の交渉やすべての全伯将棋大会を将棋連盟主催とし、従来の目伯毎日新聞社を共催または後援としたのです。
他方、棋界発展向上を目的として研究会を創設し同好者の便宜を計ったり、また山本勝造会長はじめ幹部役員諸氏及び日伯毎日新聞社のご尽力で早大将棋部副主将の烏山久夫五段のような練達の士の来伯に相まって兵庫県代表の神戸王将五段、前田克俊氏等の巡回指導による積極的向上発展策の努力でますます隆盛となり、現今のような盛況がもたらされたものと思います。
一九五九年、名人戦が選手権制となり、三段以上総出場は、いわばブラジル将棋連盟の革命的な大改革であったと思います。アマ大会はかくあるべきと大いに歓迎する次第です。一九六一年の第十四回より第五〇回大会まで、三十六年間多難を越えて続行されているこの制度が同好者に愛されている所以ではないかと思います。
第五〇回大会の記念事業である将棋人名録の刊行を祝し、幹部諸氏の努力による将棋人名録のため、多少たりとも参考になればと思い筆を執った次第であります。

# 名人戦の思い出
## “盤外”の名局

大原友重

ブラジル将棋連盟の発足と同時に誕生したと伝えられる「全伯将棋名人戦」は、丁度今年で五〇回目の記念すべき節目を迎えました。此処を舞台にして幾多の名人が輩出され、また壮絶なドラマのくり返しが演じられて来たことでしょう。数あるタイトル戦のうち最も権威あるイベントと言われる理由もそこにあるようです。

名人戦の過去を振り返る時、更なる思い出は尽きませんが、私にとって一つ忘れられない出来事といえば、日本から巨匠　大山康晴十五世名人をお招きして最高の盛り上がりを見せたあの第二十八回大会で「将棋の意外性は盤上だけに限らない」とする強い印象を受けたエピソードです。

此の目、難関を突破して無事、準決勝に進出したのは重厚のベテランK四段（当時）と地方切っての若手の強豪X四段の二人でした。周囲が固唾を呑んで見守る中、果然！　双方時間を使いはたし、秒読みに追われての大熱戦です。ただ聞こえるのは激しくボタンを押す音と打ち下ろす駒音だけ―。結局、凱歌はK四段に挙がりました。挽回策なしと読み切った如何にも清々しい投了でした（因みにX四段のマナーの良さは定評のあるところ）。思わず場内から洩れる太い溜め息！　ハプニングはその直後に起こったのです。確認のため、やおら時計を覗き込んだKサンが突然「あツー僕の針が落ちている」と叫んだからです。一度は勝名乗りを受けながら自ら判定をくつがえし潔く敗北を認めるとは……　正に将棋史上に類をみない未聞の椿事と言うべきでした。

それのみか、賞賛の拍手を浴びながら起ちあがったKサンは憮然としてたたずむ相手に笑顔で握手を求め「是非次ぎの決勝戦では頑張って下さい」と激励のエールを送ったので

す。
その瞬間、感動で胸中がいっぱいになったのは私だけではなかったでしょう。方尺の盤上にKサンの全人格の投影を視る想いがしてなりませんでした。
それにしても何んたるこの落ち着き、その余裕。「将棋は人成り！」といわれますが、正にそれを実証してくれたのです。
若しKサンの独りよがり、スタンド・プレイだと疑問視する向きがあれば最早や論外です。あれから二十年余が経ちました。毎年全伯大会が近づく度に棋譜なき此の“盤外”の名局に想いを馳せ、新たな感慨に耽ける私です。

## 埋れゆく足跡

武田　春海

移民は、柳行李を取り出すこともなく、船内には色々の娯楽物は備えられていた。五十七日間の航海で、十四才の少年もその船の中で将棋を教わった。
七十二年前、サントス港に上陸、奥地のファゼンダに配耕された。
珈琲一辺倒の時代で、農家では将棋が無二の慰安であった。コロニアでは誰が一番強いのだろう、「口こみ」の時代なので大天狗、小天狗、果ては木葉天狗までが「勝負」の話題で明け暮れ、あすは百年を迎える移民歴の前半、ジャポネース・ガランチードと呼ばれた頃の風景。

閑話休題

太平洋戦争に入るや、それまでの新聞は廃刊となり、数少なかったラジオも没収の憂き目、集会事はご法度、友達と夜更かしで将棋を差し、警察に踏み込まれ、豚箱に一晩ご厄介になったが、そんなことがあって、それよりは妻に将棋を覚

えてもらった。
安っぽい駒、何時の間にか一ツ二ツと紛失するごとに補給するのだが思う様にならず、燐寸の棒が歩の代役に、駒箱はリプトン紅茶の空缶が好個だった。その内、コロニア製の駒が出回るようになる。用材はやや堅かったがマルフィン材が黄楊に似て結構愛された。駒師は宮田幾之助氏、苅田繁信氏共に陰の貢献者だった。
「刃物」の研師で各地を行脚した浦野芳松氏（自称田舎初段）はコロニアの棋界の消息に明るく、天狗族の中では大天狗であった。第一回全伯大会に活躍した時の模様は名簿録に載っているので、ここでは省くが、コロニア版の坂田三吉であった。
終戦となる。こん度は、コロニア挙げて「勝ち負け」争いの渦巻き、疑いの解けない時期が続いた。識者は何んとか明るい宥和への道は無きものかと、これに立ち上がって解決策に名手を指されたのは誰あろう、吾々棋界の生みの親、中林武衛氏（老中先生）であった。宥和への糸口は百の論議より趣味であると喝破してこれを実施。
コロニア棋界では神代時代にメルカード方面に「と金会」「三歩会」等があった。各線各駅にも結社があり先ず手始めにと金会、三歩会を合わせ統一への第一歩とされた。盤上の指導に筆をもっては棋界の啓蒙に尽された。また山本勝造氏を大きな縄で将棋の人として結え付け、棋会を安泰たらしめた。
別途、新人の発掘に心とられ、青木、山口、西山氏等を「三羽烏」と称え（後日は青木、三浦、大原）特に大原、青木両氏などは目をかけられた仁である。
時移り邦字紙の再発刊となる。
雨後の筍よろしく、スポーツ面、文芸面、其の他、踵を接して乱立、隆盛をみたが、調子に過ぎて派閥の副産物も生じ

た。そこへ行くと将棋会は別格であった。一糸の乱れを見ず、新店の「暖簾」の話すら聞いたことがない。正しい指し手（指導方針）は勿論乍ら老中先生の手腕の賜と深思する。

老中語録、山本語録、前者は段位の件に就いて乱発を嫌われ、品位の消失、会長の良識の問題なる語を残された。山本氏は、催し事のある際に奉賀帖、特別の事情の時は別として、私の眼の黒い内はやって呉れるなと質素を旨とせられた。

連盟が病菌に冒されることなく、健全な歩みを続けられているのは、とりもなおさずお二人の言葉がバック・ボーンと成って居るのではなかろうか。

大山康晴名人の招聘の件は他に譲るが、大仕事であった。柄沢喜美雄、中林昌夫、水谷寅造氏らが山本勝造氏を補佐し、働かれたことは知る人ぞ知る。特に水谷氏などは長期にわたり会長職、また全伯大会への優勝旗（大山名人寄贈）受納など身も魂もへとへと、でも大山名人と出会ったことは男子の本懐でった。

研究会初代会長・新田健次郎氏、二代目・岩崎岱治氏共に五ヶ年ずつ務められた。道場の後半は文協の三階に落ち付いたが、それまでは腰の温まる暇もなく転々と四カ所も家移りしたのであるが、揺藍期とはいえムダンサは大変であった。また、岩崎氏は道場内部の諸設備に自家の木工所を生かし自腹で尽力下さった。五十年たった今日残っている物に対局場用メーザがある。

現役組で尊敬する人々を掲げてみる。品位の向上、場内の美化、対局マナー等色々論議の中にあって、先ず先き立つカネは出すが口は出さない。裏付けを優位（位取り）とする組に、柄沢喜美雄、桑原南、それに加えて舟橋助治氏の各位に惜しみなく拍手を送る。

第一回「会員名簿」第二回「将棋人名録」の過去二回を顧

みて、それぞれ趣は異なるが、共通していえる事は、連盟の隆盛期、それと秀れた人材に恵まれた産物であったことである。

今回、かつてない隆盛を迎え、五十年記念にタイミング上々、第三回目の出版を見るに至ったことは、欣快である。内海博氏の労を多とし、併せて連盟発展への紐帯を緩めることなく、全伯棋友諸兄の鋭意協力のあられんことを祈る。


祝 ブラジル将棋 50 年

聖南西スポーツ連盟
将棋部

Rua Dom José Aguirre, 93 Capão Bonito -SP
Fone (015) 542-1549 Fax (015) 542-1800

祝 ブラジル将棋 50 年

ブラジル将棋連盟顧問
マリリア日伯文化協会顧問
笹崎工業有限会社顧問

笹崎 孝作

マリリア市
電話（〇一四）四三三一一八九八
郵函 一九六

## 祝 ブラジル将棋 50 年

# ペレイラバレット将棋同好会

Deptº de Shogui do A. C. E. P
Pereira Barreto - SP CEP 15370-000

ペレイラバレット支部会員

| | | |
|---|---|---|
| 五段 | 木庭 | 元幸 |
| 三段 | 小松 | 辰五郎 |
| 三段 | 芝 | 忠夫 |
| 三段 | 入倉 | 力造 |
| 三段 | 輪湖 | 彰 |
| 三段 | 馬生 | 巌 |
| 三段 | 木庭 | 政雄 |
| 三段 | 三沢 | 健男 |
| 三段 | 立花 | 弘 |
| 二段 | 山本 | 正次 |
| 二段 | 木庭 | 光弘 |
| 二段 | 藪 | 親一 |

# マ州将棋連盟

| | | |
|---|---|---|
| 会長 | 柘植 | 二郎 |
| 副会長 | 岩城 | 修 |
| 〃 | 皆田 | 辰水 |
| 〃 | 石塚 | 和夫 |
| 〃 | 小原 | 康宏 |
| 〃 | 粉川 | 三一 |
| 会員 | 一同 | |

## 祝 ブラジル将棋 50 年

**CENTRAL - SEN SHOGUI RENMEI**

# 汎中央線将棋連盟

Rua Capitão Manuel Guimarães, 708 São Miguel Paulista
Vila Rosaria CEP 08021-290 São Paulo- SP
**TEL (011) 297-6414**

### 役員名（1996ー1997 年度

| | | | |
|---|---|---|---|
| 相談役 | 鍛治谷 | 日吉 | モジ・ダス・クルゼス |
| 同 | 小串 | 実 | カロン |
| 同 | 亀田 | 正記 | サン・ミゲル・パウリスタ |
| 同 | 松原 | 富士六 | カロン |
| 会長 | 金高 | 利司 | サン・ミゲル・パウリスタ |
| 副会長 | 立石 | 昭二郎 | カロン |
| 同 | 茂田 | 幸敏 | モジ・ダス・クルゼス |
| 会計 | 高橋 | 雄太郎 | サン・ミゲル・パウリスタ |
| 同 | 波山 | 隆好 | モジ・ダス・クルゼス |
| 同 | 川野 | 茂 | カロン |
| 書記 | 柳生 | 弘 | サン・ミゲル・パウリスタ |
| 同 | 井原 | 高義 | モジ・ダス・クルゼス |
| 理事 | 鍛治谷 | 兵部 | モジ・ダス・クルゼス |
| 同 | 波山 | 隆好 | モジ・ダス・クルゼス |
| 同 | 織田 | 信義 | サン・ミゲル・パウリスタ |
| 同 | 井田 | 王人 | カロン |
| 同 | 古子 | 耕三 | サン・ミゲル・パウリスタ |
| 同 | 笠置 | 秀雄 | カロン |

（おわり）


祝 ブラジル将棋50年

南米銀行はブラジルと日本の商業・文化交流の発展に尽くしています

南米銀行

NEW LIFE
CONSULTORIA EMPRESARIAL S/C LTDA.

西山 洋
EDUARDO HIROSHI NISHIYAMA
Gerente Geral

Praça Carlos Gomes, 126-conj.12
Liberdade - São Paulo - SP CEP: 01501-040
Tel:606-8284 -607-6336 Fax:: 604-1165



祝 ブラジル将棋50年

マリンガ文協将棋部

部長 神 信次郎
副部長 田中 敬也
第一会計 山形 光晴
第二会計 石田 信義
書記 三沢 勝美
外部員一同

カッポン・ボニート文化体育協会 将棋部
電話（〇一五）五四二・一一三九

聖南西将棋部
部長 五段 太田 孝之
電話（〇一五）五四二・一五四九